

THE・社長！ ～“社長”？ それとも、“しゃちょう”？～



社長プロフィール

宮治 誠人（みやじ・まさと 通称：大佐）

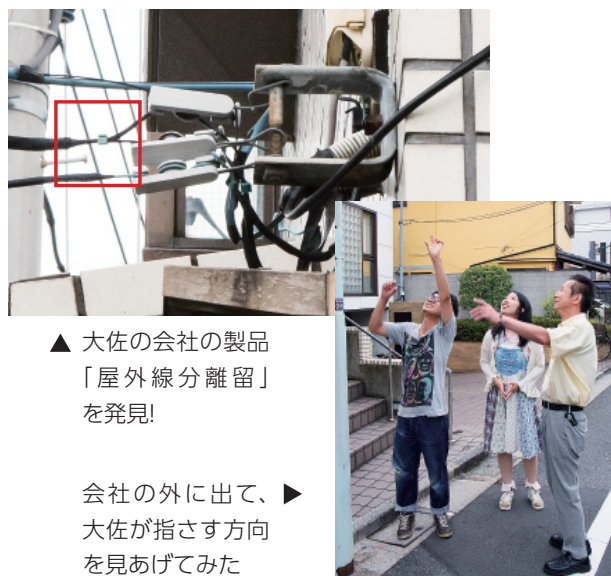
宮治通信工業㈱代表取締役、中野法人会第2支部 支部長。

営業の経験を経て、1985 年父の経営する宮治通信工業㈱に入社。1999 年、代表取締役就任。中野に構えた本社を拠点に、主に通信・電力用品を製造、全国の鉄道会社や通信会社等に販売している。中野法人会や中野 21 の会など、地元地域に関する活動も精力的に行っている。

先の事を考え、ニッチを見つけ出す

大佐は中野区で通信工事材料を製造・販売する会社を経営する社長。1947 年に設立された会社で、常に新しい事業を模索しながら様々な商品を作っている。それら商品は、一つひとつはとても小さい材料だが、日本のいたる所の通信事業を支えている。

その主力商品として、例えば「屋外線分離留」がある。これは屋外線を電柱や建物等に引き留める際に使うものである。他にも、鉄道の標識や新幹線の強化プラスチックトラフなど、普段、人々の目に入っても意識して見ないとその存在に気付かない部品ばかりが商品である。



▲ 大佐の会社の製品「屋外線分離留」を発見！

会社の外に出て、▶
大佐が指さす方向
を見あげてみた

大佐曰く、それら商品は大手企業が取扱うにはあまりに小規模であり、しかし誰かが作らなければいけない部品である。そういった、中小企業だから出来る分野が積み重なって、宮治通信工業は成り立っている。これが、「ニッチを見つける」という事である。



しかし、ニッチを見つける為には、常に先を見通す力が求められるであろう。実際に大佐が「次の人の事を考えて仕事をしている」と述べていたように、先を見通して、その先までの道のりの中で何が必要とされるのかを探し続けなければ、新しい商品は生まれない。大佐は社長として、ニッチを作り、ニッチを見つけ続けているのだ。



ハンパない！ 中野への愛

「この道はね、昔は川だったんだよ」

「あそこのお店はおいしいんだ」

みつちやく取材初日。会社訪問やお祭りに行く道中、大佐に中野を案内していただいた。小学生の頃から中野で育ったという大佐。中野の歴史、おすすめのグルメなど紹介する内容は、多岐に渡る。ずっと住んでいたからこそわかることにとどまらず、自ら地域の歴史についても調べ、まちを歩き学んだのではないかと思った。

大佐は社長になってからは、中野法人会や東京商工会議所中野支部にも携わり、数々の地域活動にも積極的に関与。みつちやく 2 日目の取材の際にも、中野の若手経営者が中心に集まる中野会という飲み会に連れて行ってくれた。「会社の事業内容は全国が相手なので地域のつながりは生まれない。中野はせっかく自分がいる居場所だから地域のつながりを大切にしたい」と語るその姿から、大佐の中野に対する深い愛を感じることができた。

THE・社長??

大佐の趣味は、数年前から友達に勧められ始めたマラソン。現在では早朝にランニングをし、大会にも出場しているそうだ。マラソンのために身体づくりの一環として加圧トレーニングも始めたのだとか。

「原動力は好奇心」と語る大佐。しかし、すべてにおいて好奇心から始まり、とことん突き詰め続けることは本当にできるのだろうか。みつちやく中、大佐は「社長は体力だ」とも語っていた。マラソンも加圧トレーニングも、実は趣味というより社長の仕事としての一環かもしれない。トレーニングに励む大佐から「THE・社長」として生き抜く姿を感じた。

一方で、みつちやく取材では我々を楽しませるために鉄道博物館など様々計画してくださり、一緒に中野

を散策しアイスクリームを食べたりもした。社会通念上の“社長”ではなく、人間そのもののありかたとして大佐の“しゃちょう”の側面も見ることができた。社会に出てからも社会通念上の立場に捉われず、平仮名的な側面を知ることが大事だと思った。



<取材：遠藤聡平（通称：そーへー・早稲田大学）、中辻美帆（通称：みつふいー・明治大学）>

人と、人との間にいる、ひと



社長プロフィール

磯長 弘美（いそなが・ひろみ 通称：イソさん）

中野区在住。翻訳会社アップドラフト代表取締役。特許翻訳を扱っている。
2015年6月1日、中野駅南口近くに、元気 & 幸せチャージ型レストラン『ナカノバ食堂』をオープン。店長とオーナーを務める。趣味はテニス、海外ドラマ、料理、ゴルフ、カレーなどなど、多岐にわたる。

翻訳家でもシェフでもないのに…

明るくて、迷いがなくて、行動するエネルギーに満ちている。とても仕事ができ、なんでもそつなくこなしてしまう人。イソさんの第一印象だ。さて、この華麗に輝くお城の、一体どこから攻めればよいのだろう…手がかりにとりあえずお仕事の話をつたところ、イソさんは主に、翻訳、中野紹介ウェブサイト、ナカノバ食堂という3本の柱で活動しているという。

しかし、イソさん自身は翻訳家でも、シェフでもないらしい。……ん？？じゃあ、この人一体なにもの？

実は〇〇だった!!

～人と、人との間にいる、ひと～

みつちやく当日。この日は依頼をしていた翻訳が仕上がったということで、それを受け取りに翻訳家の方のご自宅へ…私達もお邪魔して、お仕事風景を見せて頂いた。

「この方は本当にお仕事ができる方で、私は本当にお世話になっているのよ。お仕事が正確で、納期もきちんと守られるので、とても信頼しているし、本当に素晴らしい翻訳家さんなの」イソさんに紹介されて、「そんなそんな……」と言いながらも、嬉しそうに、そしてちょっぴり誇らしげに、顔をほころばせる翻訳家の松田さん。説明してくれる声にも熱がこもる。

イソさんは彼が何にこだわり、どんなプライドを

期待と混乱とともに私達のみつちやくはスタートした。



持って仕事をしているのかをきちんと知っているのだなあ…と感じた。そして、そのツボを心地よく押す。その人が大事にしていることに寄り添って話をふり、話を聞き、私達に説明してくれる。松田さんは嬉しそ



うで、私達もなんだか嬉しい。みんな、嬉しい。そうか、確かにイソさんは、翻訳のプロではない。でも、人と人を繋ぐプロだ。翻訳家と依頼主との間に立つお仕事

～そして、「幸せばらまきや」～

イソさん主催の中野会が、ナカノバ食堂で行われた。中野に関わる経営者が集まって飲みながら食べながら、ふらっとに、交流や情報交換を行う場で、この日も多くの人が集まった。みんながわいわい飲み食いする中、行き届いていないところはないか、楽しんでいない人はいないか目を配らせながら、自分はゆっくり座る暇もなく動き続ける姿が印象的だった。それも本当に楽しそうにイキイキと。子供たちのためにてきぱきせつせと働くお母さんを思わせるその姿に、凛とした温かさを感じた。

仕事ができる女性というイメージはやはり変わらない。でも、だからと言って、取りつく島もないという印象は全くない。なぜだろう……それはきっとイソさんが、「できる人」ではなくて「楽しそうな人」だからではないか。そう、この日に限らず、今回のみつちやく中、イソさんは一貫して楽しそうだった。まずは



昼からビールを呑みたくなる…?!

「お昼からビールを呑みたくなる」と自己紹介シートの中の「私は、人生のこんなことにモヤモヤしています!」という欄に、そう書いていたイソさん。個人的には、イソさんの魅力を探るには今回のみつちやくでは物足りなかったもので、ぜひ今度お誘いしてみよう……と密かに目論んでいる。そして美味しいビールと素敵なイソさんを堪能したあとには、ちょっと乱れたイソさんも見たい。



<取材：井上彩夏（通称：バード・早稲田大学）、菊名俊介（通称：きっくん・明治大学）>

は、それぞれの道のプロでなくとも、人の喜ぶことに敏感で、それぞれのツボにずっと寄り添うイソさんだからなせることなのかもしれない。

自分が率先して楽しむ。何かを与えてあげる、してあげる、ではなく、これ楽しいからやっちゃおう！ねえねえ一緒にやろうよ！それ楽しそうだから私もひと肌脱ごうかしら？そんなふうにして自然と人を巻き込み、人に巻き込まれていく。イソさんの周りには、いつも人がいる。

「結局大事なのは人」
「夢、やりたいこと。口にすれば、できると思っていればいつか絶対にできる」

自分もみんなも楽しいほうへ向かっていくのに遠慮なんていないじゃない？イソさんはまるで、幸せ島へと向かう船の船長。それでいて自らオールも持たがる。出発するよー！さあみんな乗って乗って！はい！こいでこいで！その楽しそうな声につられて、きっと今日も船の上は大賑わいだ。